

当報告の内容は、それぞれの著作の著作物です。Copyrighted materials of the authors

報告書

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）フィールドサイエンス研究企画センター主催
フィールドネット・ラウンジ企画ワークショップ

研究者はいかに野生動物保護にかかわるべきか

開催日時 2015年1月10日（土）13:30-18:00

開催場所 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 303 大会議室

参加者数 37名

近年、本来の生息環境を失った野生動物が人為的な環境に進出し、家畜や農作物に被害をもたらしている。大型野生動物の保護か、地域住民の生活重視か、若手研究者はこれらの問題に直面し、自分の立ち位置をどうすべきなのか、しばしば苦悩する。

本企画では、アフリカ地域と日本で実践家として、あるいは研究者として野生動物保護にかかわる人たちが、それぞれのフィールドで得られた経験を共有し、人と野生動物はどう向かい合っていくべきなのか、を議論した。

当日は研究者だけでなく、行政関係者やNPO、市民団体など現場で野生動物保護に携わる方々に多数ご参加いただいた。

第1部 野生動物保護に携わるNPOの立場から

○片岡義廣（NPO 法人エトピリカ基金代表理事）

「エトピリカプロジェクト：海鳥を知り守ろう」

浜中町のシンボルである海鳥エトピリカの生息状況の変化と海鳥保護活動について報告した。同団体は環境省、漁協および町の教育委員会と協力し、定置網の部分的禁止区域の設置、海鳥のデコイの設置によるエトピリカ繁殖定着の試みを行っている。継続的な沖合調査の結果から、エトピリカの成鳥は沿岸部に、若鳥は沖合に生息し、繁殖のために定着させることが困難であり、若鳥を呼び寄せるための海上デコイの設置がある程度有効であることがわかってきたが、保護鳥であるオジロワシによる海鳥の捕食など新たな問題が生じている。国境を越えて対策をとる必要がある海鳥保護の難しさを指摘した。

○千嶋淳（NPO 法人日本野鳥の会十勝支部副支部長／漂着アザラシの会副代表）

「トッカリとの共存を目指して」

アイヌ語でトッカリと呼ばれるアザラシと漁業被害の問題を報告した。アザラシと漁業の関係をアイヌの時代からふりかえり、研究者や行政のかかわり方について説明した。日本に唯一定住するゼニガタアザラシは1970年代に研究者によって天然記念物指定への動きが起こったが、「害獣」とみなす漁業関係者とは折り合いがつかなかった。えりも町では地元漁師や市民が中心となってアザラシとの共存を考

える会が結成されたが、アザラシ捕殺の中止を決めた環境大臣の発言が漁業者の反発を買った。行政の姿勢が問題をさらに複雑にさせる問題の根深さを指摘した。

○興膳健太（NPO 法人メタセコイアの森の仲間たち代表理事／猪鹿庁長官）

「獣害を地域の資源に」

郡上という中山間地になぜ福岡出身者がかかわることになったのか、自らの体験をふりかえるとともに、岐阜県の狩猟の現状、獣害を地域資源に変えていく試みについて発表した。中山間地の課題である里山の荒廃、野生動物による農作物の被害、猟師の担い手不足という課題に対し、若手猟師のチーム「猪鹿庁」を発足し、地域に生きるものとして地域で役に立つ人間の育成を行っている。団体としての経営は厳しく、現状では母体である NPO 法人の自然体験事業による収益が主であるが、新たなビジネスモデルにつなげ、未来に向け良い方向へ改善していくことの重要性を指摘した。

第 2 部 野生動物保護に携わる研究者の立場から

○坪川桂子（京都大学大学院理学研究科博士課程／ポポフ日本支部）

「ゴリラと住民のために研究者が出来ること」

ゴリラと地域住民の共存のために行っているガボンとコンゴ民主共和国の NGO の活動の取り組みを報告した。とりわけ、「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語が由来であるポレポレ基金は、民間の資金を利用し、元密猟者たちをアートセンターや洋裁、学校の教師として雇用してきた。これは設立者である山極氏の師であったゴリラ研究者のダイアン・フォッシー氏がゴリラ保護に熱心なあまり地域住民と対立したことで命を落としたことが教訓となっている。研究者としていかにゴリラ保護に携わるのか、若手研究者としての苦悩を語った。

○山根裕美（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程／NPO 法人ワイルドライフ・プロミシング）

「都市ナイロビに棲むヒョウと人々の関わり」

ケニアの首都ナイロビにあるナイロビ国立公園。ここに生息するヒョウの自然科学調査から、国立公園よりも人間の生活圏に近い場所に生息すること、捕食した動物の多くは野生動物であり、家畜を食べることは多くないことがわかってきた。一方、ナイロビに住む地域住民のヒョウに対する恐れ・愛情には大きな差異があり、白人居住者やナイロビ生まれのケニア人など恐れを抱く都市住民、野生動物に近い生活圏を望む動物愛護家、ヒョウは恐れていないが生活圏が対立するマサイの人々にグループ分けされる。実践家としての保護、数少ないヒョウ研究者としての使命に揺れる苦悩を報告した。

○目黒紀夫（AA 研研究機関研究員／NPO 法人アフリック・アフリカ）

「コミュニティを研究することと支援することとのあいだの隔たり」

研究者としてケニアで、NPO の実践家としてタンザニアで野生動物保護と地域住民にかかわっていく苦悩を報告した。マサイの人々の狩猟に対する思いは、野生動物保護を主張する環境 NGO などによって、ネガティブなものへと変化している。狩猟の代わりにスポーツをと、野生動物を仕留める槍に代わって投てきの槍を使用したマサイオリンピックも開かれている。狩猟に代わる生計の営みとしてロッジも建設され、観光業に携わるマサイの人たちも増えている。外部者による地域住民の意識に対する違和感を

指摘するとともに、引いたスタンスから地域住民にかかわろうとする自身の姿勢について説明した。

総合討論

研究者としてだけでなく自身も NPO 代表として野生動物保護に携わるお二人から発表者に対し、コメントをいただいた。

○山極寿一（京都大学総長／ポポフ日本支部）

長年、野生動物の研究に携わってきた経験から、これまでの辺境に調査にやってくる物珍しい研究者から、当初から地域住民とのかかわり方を考えていかなければならない若手研究者というように、研究者の意識が確実に変わってきていることが指摘された。

自然科学的手法をもとに望ましい個体数を設定する野生動物管理にどう科学者はかかわるべきなのか、そして野生動物管理の行きつく先は何なのか、厳しくも温かいコメントをいただいた。

○岩井雪乃（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター准教授／NPO 法人アフリック・アフリカ代表）

研究者と実践家の間で揺れる自らのスタンスについて、当事者性の観点から説明をいただいた。NPO の立場から発表された 3 名について、NPO・研究者・地域住民の 3 つの立ち位置を総合的に体現していると評し、キーワードとして「流動的」「相互作用」「当事者性」の 3 点を掲げた。

また、自らが学生をボランティアとして NPO に派遣している立場から、これから野生動物保護にかかわろうとする人たちにどう生活を維持しながら活動を進めていけるのか、実践的アドバイスを求めた。

